

特集 専門家解説

# 「挫折力」を磨く

人生でつまずいたり、転んだりするのは当たり前。

そう考えられれば、深く落ち込まずに  
人生を前向きに歩いていくことができます。



と やま かず ひこ  
**富山和彦** (経営共創基盤 (IGPI) 代表取締役 CEO)

1960年生まれ。東京大学法学部卒業。ボストンコンサルティンググループ、コーポレートディレクション代表取締役社長、産業再生機構COOを経て、IGPIを設立。数多くの企業変革や業界再編に携わり、現在に至る。主な著書に、「カイシャ維新」(朝日新聞出版)、「経営分析のリアル・ノウハウ」「挫折力」(ともにPHPビジネス新書)などがある。

◎永井浩

## 成長のチャンスととらえよう

「挫折」という言葉を聞いて、皆さんはどんなイメージを抱かれますか。おそらくマイナス的な要素が強く、できればそんな体験は避けたいし、あっても隠したいと思うのが人情でしょう。でも、じつは挫折こそ自分を成長させてくれるチャンスなのです。

人間はとかく惰性の生き物です。壁にぶつかることがなければ、ことさら努力しないうすませようとしがちです。しかし失敗を経験すると、なぜそうなったのか、原因を探ります。自分に何が足りなかったのか、次にどんな努力をすればよいのか、真剣に自分を見つめ直すようになります。

ですから、失敗や挫折を否定的なイメージでとらえる必要はないのです。打たれ強くなり、何より「己」というものを知ることがで

き、それこそが成長への近道となる。確信をもってそう言えるのは、私が倒産や企業再生の修羅場に何度も身を置き、その渦中で実にさまざまな人生ドラマを目の当たりにしてきたからです。

## 「受け身」がうまくなる

今、たいへん不安定な時代を迎えています。日本の企業では終身雇用制度・年功序列が崩れ、優良企業であってもリストラが行なわれるなど、定年まで会社が面倒をみてくれることは期待できなくなりました。就職人気ランキングの高い会社に運良く入社できたとしても、二十先、いや十年先に、その会社が存続している保証はどこにもありません。そんな時代なのです。ですから、人生には挫折はつきもの、挫折してもしかたがない、と考えたほうが生きやすくなります。

ずの人間だったにちがいないからです。

挫折力が大切な理由はほかにもあります。学校の試験で正解は基本的に一つです。しかし、今日、社会で正解は一つではなくなりました。「このルールに乗って進めば安心」という標準的なコースが崩壊したからです。正解はあらかじめ用意されていないし、一つでもありません。そういう社会に私たちは生きています。とすれば、失敗や挫折を繰り返しながら、自分なりに正解を求めていくしかありません。

めまぐるしく変化する今日の社会では、勝ったり負けたりの繰り返しです。しかし、負けたことをいつまで引きずっていてもしかたがないし、逆に勝ったと驕っていても、そんな驕りなんてすぐに打ち砕かれる。そこで必要になってくるのが、ストレスに負けない力。ストレス耐性です。いくら頭がよくても、あるいは優秀なスキルをもつていても、人間は芯の部分が弱ければ、強い負荷がかかると

挫折力を培っていけば、不遇な環境に置かれても潰されずに生きぬいていきます。挫折力は免疫力でもあります。何度も転んでいけば、大きな失敗に出くわしても痛手が少なくてすむ。柔道でたとえるなら「受け身」がうまくなるからです。

私は東大卒業と司法試験合格という二つの肩書きをもち、世に言うエリートコースを歩んだように見えますが、じつは司法試験を三度も挑戦しています。猛勉強して絶対の自信で挑んだ二度目の受験で失敗したときは、かなりの打撃を受けました。また、就職した会社でも絶頂の極みから一転して出向という名の地方への都落ちで、挫折感二〇〇パーセントもの苦渋を味わいました。しかし、振り返ると、むしろ、これらの経験が私の成長の糧になったのだとつくづく感じるので。もし挫折を経験しなかったら、空虚なエリート意識をもった、きつと鼻持ちならない世間知ら

いとも簡単にボキッと折れてしまう。心をしなやかに、逞しくしておくことが肝腎です。

## 挫折力を磨く四つのポイント

では、挫折力を磨くにはどうすればよいのでしょうか。

第一に、なるべく若いうちから挫折の体験をしておいたほうが良い。順風満帆に人生を歩み、社会的地位を得た人が歳を重ねてから突然挫折すると脆いもので、ガタツと崩れてしまいます。歳をとるほどダメージが大きくなる。でも、若いうちの挫折はたいしたことではありません。どこかに左遷されたところで給料が半分になるわけでもない。生きていきます。ですから、リスクを厭わず何にでも挑戦し、挫折力を鍛えておくべきです。運動と同じように、挫折を繰り返すことでストレス耐性がつき、打たれ強い人間に成長します。

第二に、世の中にはいいことも悪いこともありすが、それを表裏一体と受けとめることです。IT企業の一夫一婦として世界に名を知られるシリコンバレーは、一九九〇年代前半、ITバブルが弾け最悪の状況でした。ステイブ・ジョブズも自らが創設したアップル社を追われ、すでに過去の存在とみなされ、不遇を託っていました。しかし、振り返ってみれば、そのどん底の中から新しい芽が吹き、IT社会が花開いた。ジョブズもまた返り咲いてアップルを再建し、米国最大企業に押しあげたのは、皆さん知つてのとおりです。巨木が倒れる際、その足許には次の新しい芽が芽吹いています。失敗と成功は輪廻。そう考えれば、たとえどん底に落ちても、これで底は打ったのだから、あとは上を向いていくだけだと、立ち上がればいいのです。

第三に、世の中には理不尽なことが多いですが、それも謙虚に受けとめることです。不

合理は減らせても、理不尽ことはなくせません。謙虚に受けとめるということは、決して諦めることではない。たとえば人間の能力は多様で、人それぞれに個性があります。なのに横並びにこだわろうとするから、悩んだり落ち込んだりする。自分らしい個性をどう活かすか伸ばすかを考え、そこに力を注ぐべきでしょう。

第四に、これからの社会では、想定外のことがどんどん起こります。ですから、崩れかけた既得権益に必死にしがみついても窮屈に生きるのではなく、どんな環境の変化にも潰されない適応能力を鍛えることです。親や教師、職場の上司も、わが子や若者たちに、そういう力を育む教育や指導をしていくことが求められると考えます。

人生を決して諦めず、挫折力を磨いて、したたかに、そして愉快に生き抜いていきませんか。